



太い薪をナタで細かく削って焚きつけを作る。木口に刃を食い込ませ、別の薪でナタの背を叩いて削ると安全。ナタを振り上げると危ない



【右】キャンプで一番多いケガはやけど。薪や火を扱うときに革手袋は必須。ホームセンターで手に入る安価なものでOK  
【左上】ハサミやカトラー、柄の長いライターなど、あると便利な小道具セット  
【左下】焚き火は、焚きつけにバーナーで豪快に着火するのが松山流。よく乾いた薪を用意すること

案内で初めて天幕を張られた  
ここに我等は先覚者の道を辿り  
今後の弥栄を祈りこの碑を建てる

一九六〇年八月  
ボーイスカウト日本連盟  
総長 三島通陽

ここに記されている中野忠八氏は、京都でボーイスカウト活動を始めた先駆者だ。『テント生活の仕方』（1924年刊

## 第2章 グランピング GLAMPING

実際に  
楽しもう!



のんびり、  
ゆったり!

「グランピング」とは「グラマラス」と「キャンプ」を組み合わせた造語。今度は琵琶湖の南西、日本のキャンプ発祥の地・高野原のそばで、グランピングを体験!

朝の柔らかな光がテントの中に差し込んでくる。木立の中から鳥の可愛らしい声が聞こえるけれど、姿は見えない。昨日降っていた雨は完全に上がり、明るい空に白い雲がはつきりとした形を作って浮かんでいる。松山さんがシングルバーナーでさっと湯を沸かし、熱いコーヒーを入れてくれた。

「いつもよりちよつと早起きして、こうやってゆつくり朝の時間を過ごすのもいいですよ。今、キャンプブームと言われている、休日はこのキャンプ場に行っても人が多いけれど、朝は自然の音に耳を澄まして静かに過ごしたいですよ。草木の葉擦れとか、小川のせせらぎとか。そよ風も気持ちいい。前の晩にちよつと飲みすぎても、こんな朝は二日酔いにならない気がするもんですね」

昨日とは打って変わって春の陽気が照り晴れ晴れとした景色。群青色の穏やかな湖面は太陽の光を受けてキラキラと輝いていた。

「雨のキャンプも趣がありますけど、やっぱり青空にはかないませんね」

飯島さんのナンションも上がってきた。グランピングでは、通常食事は準備されているが、飯島さんにアウトドア料理のコツを教えてもらうため、途中見つけた直売所で地元産の採れたて野菜と地鶏を入手。それからもう1カ所、立ち寄りた地所があった。琵琶湖八景の1つ「涼風・雄松崎の白汀」である。約3キロにわたって白砂青松が続く景勝地だが、目的はその眺めではない。実はここ「日本ボーイスカウト初野営の地」なのである。ボーイスカウトはキャンプやハイキングなどのアウトドア活動を通して、少年の自主性や協調性、社会性を育むことを

それから森の遊歩道をのんびりと散歩し、その間に濡れたテントやタープを乾かして撤収。この日は、場所を移動してグランピングを体験するのだ。ホテルのような感覚で過ごせるちよつと豪華なキャンプである。目指すはビワコグランドスタ。大津市の西部を走る比良山地を望む湖畔に面したキャンピングリゾートだ。

**ボーイスカウト初野営の地**



【右・左】雄松崎に立つ「日本ボーイスカウト初野営の地」の碑。当時もキャンプをするならやはり風光明媚な地がよかつたのだろう



目的としている。あくまで教育の一環でレジャーとしてのキャンプとは異なるものだが、1907年（明治40年）にイギリスで生まれたその活動が日本に伝わり、今につながるキャンプ文化の原点になったのは間違いない。

雄松崎に立つ記念碑には次のような碑文が記されている。

この白き浜辺 緑豊かな松の陰に  
一九一六年  
故中野忠八氏がスカウトを連れ  
現理事長 久留島秀三郎氏の